

「ないておどかしたってだめだよ。」とよくできる大きな子がばかにするような、にくみきったような声でいって、うごくまいとするぼくをみんなでよってたかって二階かいにひっぱっていこうとしました。ぼくはできるだけいくまいとしたけれども、とうとう力ちからまかせにひきずられて、はしご段だんをのぼらせられてしまいました。そこにぼくのすきな受け持うもちの先生のへやがあるのです。

やがてそのへやの戸とをジムがノックしました。ノックするとは、はいってもいいかと戸とをたたくことなのです。なかからはやさしく「おはいいり。」という先生の声こゑがきこえました。ぼくはそのへやにはいるときほどいやだと思おもったことはまたとありません。

なにか書きものをしていた先生は、どやどやとはいってきたぼくたちをみると、すこしおどろいたようでした。が、女のくせに男おとこのように首くびのところところでぶつりと切きったかみの毛けを右の手みぎのてでなであげながら、いつもの

とおりのやさしい顔かほをこちらにむけて、ちょっと首くびをかしげただけで、なんのご用ごようというふうをなさいました。そうするとよくできる大きな子がまえにでて、ぼくがジムの絵えの具ぐをとったことをくわしく先生せんせいにいつけました。先生せんせいはすこしくもった顔かほつきをしてまじめにみんなの顔かほや、はんぶんなきかかっているぼくの顔かほをみくらべていなさいましたが、ぼくに、

「それはほんとうですか。」ときかれました。ほんとうなだけども、ぼくがそんないやなやつだということを、どうしてもぼくのすきな先生せんせいに知られるのがつらかったのです。だからぼくはこたえるかわりにほんとうになきだしてしまいました。

先生せんせいはしばらくぼくをみつめていましたが、やがて生徒せいとたちにむかってしずかに、

「せつこつてもちがひがいます。」といつて、みんなをかえしてしまわれました。